

15. 千々石断層と唐比^{からこ}の泥炭

地 域	愛野展望台—塩屋海岸—唐比
交 通	バス 愛野展望台で下車
地形図	肥前小浜 (1/50,000)

雲仙行きバスが中休みする愛野の展望台の下は 100m 余の断崖となっていて、眼下に広がる橘湾（千々石湾）の眺望が素晴らしい。この崖はほぼ一直線に東西方向に伸びていて、東方の延長部は島原半島に入り、鉢巻山の南斜面を鋭く切っている。

この崖は、地質時代のごく新しい時代に始まった断層活動で、南の橘湾側が落ちて生まれた断層崖である（最大落差 300m）。地表では年月がたつにつれ風化や浸食を受けて、地形は崩されてゆくため、断層崖がはっきりとみられることはまれである。この断層は千々石断層と呼ばれ、現在もなお活動していて地震を生じることがある。

千々石断層は鉢巻山の南斜面から吾妻岳、鳥甲山、舞岳などの南斜面を通して島原市に至る。5月の日曜巡検会で田代原から吾妻岳へ上ると急峻な断層崖の岩間のミヤマキリシマ群落の紅は深い谷底の緑を背景に浮き立ち、しばらくの間眺めて立ちつくした。

愛野の展望台を後に眼下の橘湾の眺めを楽しみながら千々石へ向う。図の①で凝灰角れき岩質の露頭がみられる。これは広大な雲仙火山の裾野を作る泥流の一部で、中には人頭大～拳大のれきを含んでいる。このれきの中には風化のため、手でもみつぶせるほど軟かくなつたものがあり、その中に 5mm 内外の白い斜長石や黒い角せん石を含むものがある。両者とも新鮮である。1つ1つ結晶を拾い出すのもいいが、母岩とも持ち帰り、水中で篩を通すと、簡単に数多



唐比～塩屋ルートマップ

く的美晶が得られる。この中には、いろいろな形の双晶が含まれている。

塩屋までは多くの露頭でこの泥流の状態がみられる。塩屋より海岸の道を西へ向う。千々石断層崖を下から

見上げることになる。はじめに通った愛野の展望台下の崖は雲仙火山の泥流で、いくつもの堆積輪廻がみられる。この輪廻は下部に径数10cmのれきがあり、上位へしだいにれきの径が小さくなり、最上部は砂～泥質となって終る。この上位にはまた巨れきが重なって輪廻をくり返す。

図の②では海岸に巨れきが重なり、中の湿地を千々石湾の波浪から守る堤防の役をつとめている。この湿地は潟湖が泥炭で埋まったものであって、泥炭のもとになった植物のおおかたは原形をとどめないが、中には樹枝やドングリの実などが残っていることがある。泥炭は近くの工場で、ロータリーキルンで乾燥し、粉碎して脱臭剤を作っている。泥炭の分析値は水分 9.0, 灰分 9.8, 揮発分23.0, 固定炭素 8.2, 発熱量 1,770 calである。

湿地の一部に水田が開かれていて、周囲には輝石安山岩よりなる丘陵地が広がっている。

泥炭は唐比のラグーン（潟湖）を埋めている。千々石湾沿岸には砂しが伸びて潟湖を完成する直前のもの（戸石の下池や対岸の牧島の曲り、下釜の舟津）や潟湖となったもの（川原の大池）、潟湖が土砂で埋まってしまったもの（唐比、野母高浜や千々石の海水浴場背後の水田地帯）など種々の発達段階のものがみられる。

（堀口承明）